

## [報告] 第 34 回歴史地震研究会参加記

国立科学博物館 理工学研究部\* 室谷 智子

### A report of the 34th annual meeting and field trip

Satoko MUTOTANI

Department of Science and Engineering, National Museum of Nature and Science, 4-1-1 Amakubo, Tsukuba,  
Ibaraki, 305-0005 Japan

#### § 1. はじめに

第 34 回歴史地震研究会は、平成 29 年 9 月 15 日から 17 日にかけて開催され、公開講演会は開催せず、15 日と 16 日の 2 日間つくば市の「つくばイノベーションプラザ 大会議室」にて研究発表会が、17 日は巡検が実施された。研究発表会は 2 日間合わせて会員 84 名、非会員 26 名の計 110 名と、これまでの歴史地震研究会を見ても、かなり多くの方が参加された。つくばという土地が、東京からつくばエクスプレス (TX) を使えば 1 時間もかからずに気軽に行ける、ということも要因かもしれない。私自身は東京に住み、毎日 TX を使って通勤しているので、定期券で研究会に通う唯一の参加者だったのではないだろうか。また、巡検は台風という悪天候ではあったが、34 名の参加があった。大変申し訳ないことに、私自身の研究発表を行うことはできなかったが、代わりに本稿にて研究会の様子を報告しようと思う。

#### § 2. 研究発表会

参加人数が多いとあって、会場となった大会議室はほぼ満席に近かったのではないだろうか。2 日間に渡り、口頭発表が 38 件、ポスター発表が 16 件と多くの発表があり、活発な議論が行われた。今回特に感じたのは、石碑や遺跡といったものから地震を見る、という発表が多かったということである。現地に出向き、苦労して資料を集められた話などを聞き、歴史地震の研究は、根気と足でかせぐということを改めて感じた 2 日間であった。

##### 2.1 口頭発表

口頭発表は 10 セッションに分けられ、1 日目は、「地震に伴う諸現象」、「史料批判と情報活用」、「江

戸時代以前の歴史地震」、「前近代の津波・沿岸地震」、「台湾及びインドネシアの地震」のセッションがあり、地震・津波そのものに対する研究発表や、史資料の検討のほか、歴史資料から推定される地震・津波像だけでなく、数値計算も組み合わせて断層モデルを検証する、という発表も見られ、そのテーマは多岐にわたった。個人的にはっとさせられたのは、林能成先生による台湾地震の被害と日本・台湾での対応に関する発表であった。日本の地震学の発展を語る上で、濃尾地震や関東地震を例に挙げることが多いが、この両地震の間や関東地震後には台湾で被害地震が発生している。そして、確かに当時は日本統治時代なので、日本には台湾の地震に関する報告や波形記録が多く残っているし、日本の地震と言えなくもないのであるが、日本の地震の歴史からは外して考えてしまっていた。地震後に行われた被害対策など、お互い影響し合っていた可能性がある、ということで改めて注目したいと感じた。

2 日目は段々と時代が新しくなり、「近世の地震 I」、「近世の地震 II」、「明治・大正期の地震」、「三陸の津波」、「関東地震」のセッションがあり、歴史資料を用いた地震被害の検討や、行政や寺社資料による地震時の被害や対応についてなど、1 日目と同様、多方面から地震像を捉える発表があった。明治以降の地震を研究対象としている私としては、馴染みの深い地震が増えてきた。1923 年の関東地震は発生から 95 年を数えるが、まだまだ新しい知見が出てきている。100 周年の頃には、さらに地震の詳細が明らかになっていることを期待したい。2 日間に渡る研究発表の最後を務められたのは、武村雅之先生であった。関東地震に関連して建てられた石碑から復興の様子を見る、という発表であった。現在は、地震・津波の発生

\* 〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1  
電子メール: s-muro@kahaku.go.jp

や震災被害を忘れない、という意味合いで石碑を建てるであろう。しかし、関東地震の際には、何かに感謝を述べる意味で石碑を建てることも多かったという。震災は悲しい出来事ではあるが、感謝の気持ちを持って復興を進める、という前向きな気持ちも必要だと感じた。確かに、2016年の熊本地震を見ても、前向きな気持ちを持つ地域の復興はかなり早いのである。

## 2.2 ポスター発表

ポスター発表は、大会議室の隣の中会議室で行われた。会場は盛況で、なかなか目的のポスターにたどり着けない状況であった。

1 日目は、歴史的な地震に関する発表と、1923年関東地震に関する発表であった。歴史資料を丹念に調べられ、また現地調査などから地震像や地震被害についてまとめられていた。興味深かったのは、中村亮一氏による「なぜ1923年関東地震による東京の断水は3日後から回復できたのか」という発表であった。私費を投じて多くの人命を救った偉人を、また一人知ることができた。

2 日目は、地震史料のデータベース、1944年東南海地震に関する発表のほか、関東地震を公文書資料、寺院・神社の資料や石碑等、様々な視点から見た発表が3件あった。特に、北原糸子先生らによる発表(説明は諸井孝文氏によって行われた)は、相当のご苦勞をされて資料を集められたとのことで、当時は寺院と檀家の関係が相当深く、しかも寺社の力が相当強かったということ併せて学ばせていただいた。また、埼玉県栄東中学校の生徒さんたちによる発表もあり、一生懸命頑張って説明されている姿が初々しかった。将来、またこの場で会えるだろうか。

## §3. 懇親会

一日目の夜には、ホテルグランド東雲にて懇親会が開催された。どうやら前回つくばで歴史地震研究会が開催された際の懇親会も、同じ日、同じ場所だったようである。48名の参加者があり、料理も美味しく、会場のあちらこちらで話に花が咲いており、あっという間に2時間が経っていた。

## §4. 巡検

本来であれば、「鹿島・銚子・香取:歴史と地形、地質を訪ねる」と銘打たれ9月17日に行われた巡検は、鹿島神宮、小畑池、屏風ヶ浦、伊能忠敬記念館を訪れる予定であった。ところが、前日の時点で台風18

号の接近に伴い、かなりの強風と雨が予想されたためルートの一部変更し、雨が比較的弱いであろう午前中に小畑池、午後は伊能忠敬記念館のみとし、早めに解散するという行程となった。

参加者34名を乗せたバスは、8時半につくばを出発し、まずは小畑池に向かった。バスの中で、当初見学予定だった屏風ヶ浦の地形・地質について、宍倉正展氏より解説があった。犬吠埼に近い小畑池(写真1)では、さすがに風が強かった。案内して下さったのは東北学院大学の柳澤英明氏で、小畑池で行った調査から見つかった津波堆積物に関する紹介があり、小畑池には何度も津波が襲来していたとのことであった。この地の標高は11mだそうで、かなり大きい津波が到達していたことに驚いた。



写真1 小畑池と参加者一行



写真2 巡検参加者による集合写真(写真撮影・提供:沼田清氏)

小畑池の見学のあとは、犬吠埼のレストランで昼食をとり、海の幸を堪能した。雨が小雨になっていたので、灯台や周辺を見学する人もいた。少し雨が強くなってきたところで、灯台をバックに記念撮影を行った(写真2)。

昼食後は香取市佐原にある、伊能忠敬記念館を訪れ、学芸員の方に、館内を一通り案内していただいた。伊能忠敬は50歳から天文学の勉強を始め、55歳から全国を測量してまわった。作成された「伊能図」は、江戸時代に今と同じような測量機器がないにもかかわらず、とても正確な地図である。展示室の入り口では、伊能図と現在の地図とを重ね合わせた映像を見ることができ、最初から引き込まれた。その測量に使われた測量器や伊能図の下絵となった地図や文書類等の多くの国宝を所蔵・展示している。現在、国立科学博物館で測地・測量に関する資料を担当している身としては、近々訪れたいと思っていた館の一つであり、見学時間があと1時間あっても足りない、というくらい興味深い展示物が多くあった。記念館に展示されていたいくつかの資料は、国立科学博物館にもレプリカが展示されている。こちら機会があれば、ご覧いただければと思う。また、記念館の前には、小野川を挟んで伊能忠敬の旧宅がある。こちらには時間がなく足を踏み入れることはできなかったが、平成30年(2018年)は伊能忠敬没後200年ということもあり、また改めて訪問したいと思う。個人的には、記念館近くにかかる地元の偉人の名前を付けたという忠敬橋の四分儀のオブジェクトが気に入った(写真3)。

ここで全ての行程を終え、帰路についた。途中、佐原駅に寄り、電車で帰る人はここでバスを降りた。実はその後のバスの中では、つくばからTXで帰るのとどちらが早いかわいかで盛り上がったのである(実際、TXの方が安く、若干早かったのではなかったかと思う)。16時過ぎにはつくばに到着し、無事、第34回歴史地震研究会は終了となった。

#### §4. おわりに

前回、つくばで歴史地震研究会が開催されたのは2008年である(残念ながら私は参加できなかった)。この数年でつくばの駅前は大変大きく様変わりしたこともあり、その変貌に驚かされている参加者も多かったようである。次回の歴史地震研究会は、大分市にて行われる。私にとってはおそらく初めての訪問になる。今から多くの研究発表と巡検を心待ちにしたいと思う。

最後に、この時期は仕方ないのですが、台風というトラブルに見舞われながらも本大会を円滑に運営してくださった行事委員会の皆様に感謝申し上げます。



写真3 小野川にかかる忠敬橋と四分儀